

所報



力太画

平成12年3月



「総合的な学習の時間」について — 大いなるチャレンジ —

東京学芸大学教授 児島 邦宏

「総合的な学習の時間」のやっかいなところは、その出発点にある。つまり、課題やテーマをどう創り出すかが難しい。

この学習が子ども主体の、子どもから出発した学習であることからすれば、子どもから問題が提起されてくるのが筋であるが、実はいつまでたっても問題が生まれてこない。

なぜかといえば、子どもは国際化にしても環境問題等にしても、何ら痛痒を感じていないからである。日常の毎日の生活に十分に満足して、楽しく暮らしている。何ら問題はないのである。

子どもから問題が出てこないのも、教師の側から問題を提示すると、教師引きまわしの活動となる。問題意識がないわけであるから、教師の指示通りには動いても、自ら考え、自ら学ぶ問題解決学習とは成りえない。

そこでどうするかである。子どもは「環境問題」としてはとらえていなくても、身の回りの自然のこと、環境のことには興味をもっている。その子どもの心の中を掘り起こすことから始まる。

東京の下町のある小学校の4年生が、「この学校にもっと緑や花がほしい」と言った。校庭も狭く、木も数える

ばかりで、花壇も取って付けたようなものである。だから、「ほしい」と言ったわけである。

担任の教師は、この子どもの願いを聞き逃さず、環境学習として構想した。4年生の社会科のゴミの学習を発表させ、「私たちは、この学校の中で、ゴミを出していないだろうか？そのゴミはどう始末されているのだろうか？」から、学習が始まった。

やがてこの問題は、給食の残りものの生ゴミ→コンポストでの肥料づくり→この肥料でのサクラソウの鉢植え栽培→学校中に鉢を置き緑と花でいっぱいの環境づくりへと展開した。子どもの願いやつぶやきを、どこまでキャッチし、学習として構想するかである。

それだけに、この学習では、すべての単元がうまくいくとは限らない。昨年3月まで務めていた附属小学校長での経験によると、子どもが食いついて離さない、問題が問題を生んで膨らんでいく単元は、半分あまりであった。

それだけに、この学習は少なくとも10年がかりでの仕事となる。移行期で始末できるほど甘くない。幸い、すべては学校の創意工夫に委ねられている。このことを逆手にとって、「大いにやらせてもらいましょう」と、大いなるチャレンジへと邁進したい。

もくじ

- 巻頭言 P. 1
- 研究の紹介 P. 2, P. 3
- 写真でつづる研修講座 P. 4, P. 5

- 教育実践のアイデア P. 6, P. 7
- 教育センターひろば P. 8

高度情報通信社会における 情報教育の在り方に関する研究

前教育センター主任指導主事 神津 住男
教育センター指導主事 板敷 憲政
指導主事 前田 憲壯

インターネット等の情報通信ネットワークの普及に伴って、情報化は想像を超える規模・速度で進展しています。このような時代にあって、学校教育においても、多彩で豊富な情報を主体的に処理し選択する能力をもち「情報の主人公となる人間」の育成を図る必要があります。

本研究では、そのような情報活用能力の育成をめざす情報教育の進め方について探りました。

1 情報活用能力を育成する情報活動

情報教育の推進に当たっては、児童生徒が情報や情報機器を主体的に選択し活用するとともに、情報を積極的に発信する活動ができるような場面の設定を行う必要があります(図1)。

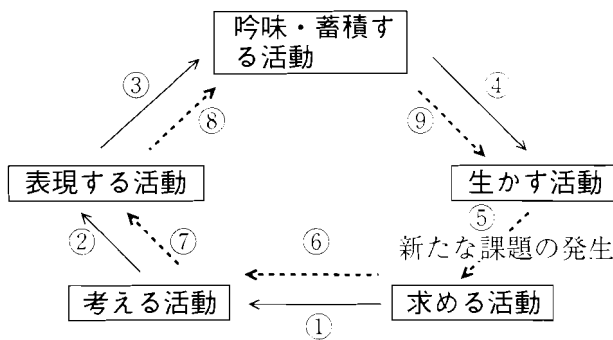


図1 情報活動のサイクル

情報活動は、課題解決に向けて情報を**求める活動**、求めた情報を理解し課題解決に必要なかどうかを取捨選択する活動(**考える活動**)、必要な情報を解決のために処理加工する活動(**表現する活動**)、生成した情報を自ら吟味・蓄積する活動、そして他者への発信をする活動(**生かす活動**)というサイクルで展開します。このような情報活動を充実させることにより、児童生徒の情報活用能力の育成を図ることができるのです。

2 情報通信ネットワークの活用

情報活動を行い主体的に情報活用するためには、教師から児童生徒へ一方的に情報提供するだけでなく、児童生徒が互いに情報を交換できるような共有空間の中で活発なコミュニケーションを通して学習を展開す

ることが必要です。さらに、学校が他の学校、教育関係機関等と共有空間を持つことによって、児童生徒は自分たちとは異なった社会的・文化的背景から生まれてくる多様な考え方や価値観にふれながら学習を深めることができるようにする必要があります。共有空間を拡大するのが情報通信ネットワークです(図2)。

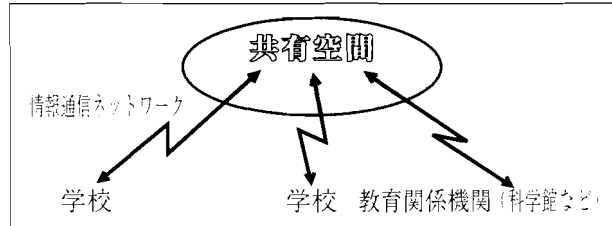


図2 共有空間

3 情報教育の体系

情報活用能力を育成するに当たって、児童生徒がコンピュータや情報通信ネットワークを活用できるようになるには、基本的な操作力から応用的な操作力を必要とします。また、児童生徒のコンピュータを利用した学習は、慣れ親しむ段階から探究的な学習での高次な活用へと発展していきます。

このことから、今回、操作力と学習活動に対応した情報教育の体系を明らかにしました。表1にその一部を示します。

表1 小・中学校における情報教育の在り方

学校段階	情報教育の在り方	学習可能なコンピュータ等										可能な学習活動			
		基本操作	図形	映像	音声	文字	表	通	記	表現	制作		調	探究的な活動	
小学校	低学年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	中学年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中学校	高学年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	中学校	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(○印は学習可能な学習活動を示します。)

※詳細は、教育センター研究紀要第19号をご覧ください。

情報通信ネットワークの教育利用に関する研究

—インターネットの活用事例を中心として—
教育センター指導主事 松浦 俊雄

中等理科教育において、情報通信ネットワークを積極的に活用するよう配慮することが、新学習指導要領で示されました。

この研究では、中等理科教育において情報通信ネットワークの中核となるインターネットの教育利用をどう具体化すべきかについて探りました。

1 インターネットの活用の意義

インターネットを理科教育で利用することは、次のような意義があります。

① 観察、実験データ等の共有

観察、実験のデータや自然科学上の研究成果が蓄積された各種のデータベースをグローバルに共有して利用できる。

② 他者の考えの受容と自己の考えの表現

即時にファイル交換ができ、電子メール等を利用して、空間的な隔たりを超えた意見の交換を容易に行うことができる。

③ 情報活用能力の育成

インターネット上の強力な検索システム（検索エンジン）を利用した「調べ学習」やホームページによる情報の発信などを通して、高度情報通信社会で必要な情報活用能力の育成ができる。

④ 学習活動の活性化

インターネットによって、他者とのかかわりが地理的な面も含めて拡大することで、学習活動が能動的、活動的、主体的なものとなる。

⑤ 教材研究の充実

教材研究における他の教師や研究者との情報交換や資料収集、あるいはインターネット上に登録された学習ソフトウェアの利用が図れる。

2 インターネットの基本的な活用事例

ここでは、理科教育でインターネットを活用する際の基本となる事例の一つを紹介します。

＜学習情報の提供と利用にかかわる事例＞

第2分野「大地の変化」の地震の学習指導において、教師が情報通信ネットワークを利用して従来の手段では入手が困難な指導情報を入手し、学習情報として生徒に提供し、利用させることをねらいとした事例です。

この事例では、インターネット上の情報を検索・閲覧して得られた情報を、著作権の規定に十分留意しながら図1に示すような流れで活用します。

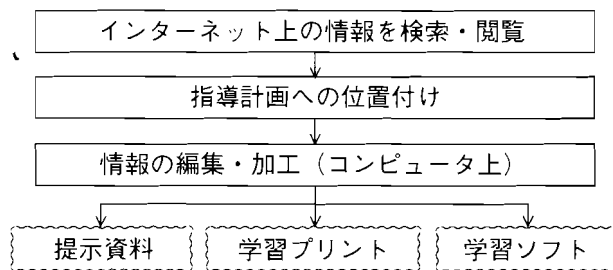


図1 情報の活用の流れ

こうして指導計画に位置付けられた提示資料や学習プリント、あるいは学習ソフト（図2）などの教材を作成し、授業で活用します。

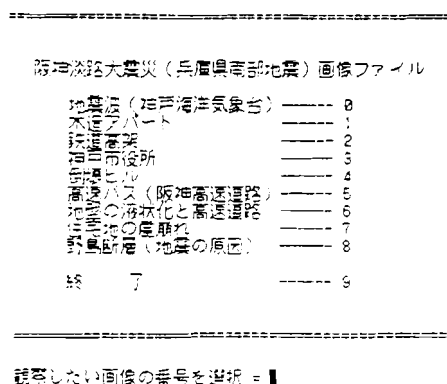


図2 学習ソフト（メニュー画面）

このような学習指導を行った際の生徒の感想例を次に示します。

- ・パソコンで阪神大震災の時のいろいろな写真を見た。生々しい被災者の手記を読んだりして、その当時のことがすごくわかった。パソコンでのインターネットもはじめて見たけどすごく興味が有り、これからもしてみたいと思った。
- ・これからも絶対インターネットを使った方がいいと思う。そうしたら印象が強くなるから頭にも入りやすいし、理科が好きじゃない生徒もきっと理科が好きになるはず。

3 情報の交流に向けて

理科教育でのインターネットの活用は、先に述べたインターネットの基本的な活用事例にとどまらず、生徒や教師、あるいは社会の人々との情報の交流がなされることで完結すると言えます。そのためには、生徒の情報モラルを含めたインターネットの活用能力を、今後は他教科等と連携して学校教育全体の中で育成することが求められます。

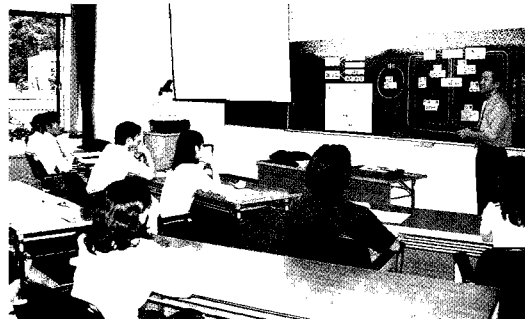
※詳細は、教育センター研究紀要第19号をご覧ください。

写真でつつ



学級経営講座（5/24, 9/8, 1/24）

子ども相互の人間関係を育てる学級経営の在り様について、一つの学級の変化を追いながら、1年間を通して研修しました。



教育実践基礎講座

（5/25, 9/10, 10/12, 11/15, 1/17, 2/16）

子どもが伸び伸びと楽しく学校生活を過ごすための教育実践の進め方について、演習や協議、授業研究等を通して実践的に研修しました。



教職経験者研修講座Ⅰ（6/15, 10/15, 1/17）

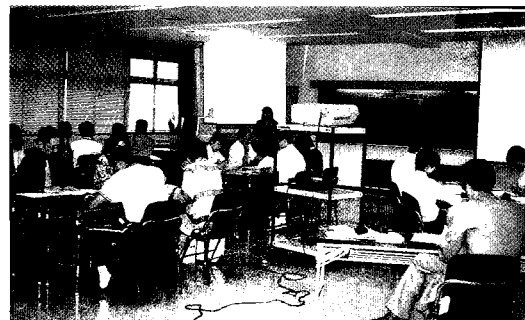
「教育実践の充実と教員生活のステップアップ」を主題に、自分の教育実践を振り返ることを通して、教育実践の充実に向けた教員としての在り方について研修しました。



教職経験者研修講座Ⅱ（6/2, 10/12, 11/8）

「教員としてのライフ設計」を主題に、異なる職業の人の生き方にふれることなどを通して、教員としてのライフ設計について研修しました。

今年度は、教育実践基礎講座、教職経験者研修講座Ⅰ・Ⅱ等を新設し、先生方のライフステージに応じた研修ができるように、学級経営講座や学習指導講座等と合わせて講座の体系化を図りました。



学習指導講座（5/14, 8/27, 11/9）

個の学びを育む授業づくりの在り方について、授業研究等を通して実践的に研修しました。

る研修講座



学習指導特別講座（5/14）

中京大学の三宅なほみ教授を講師に招き、個の学びを育む授業づくりの基本的な考え方などについて研修しました。



「総合的な学習の時間」特別講座（6/28, 8/5）

「総合的な学習の時間」のテーマ設定や学習活動の在り方について、東京学芸大学の児島邦宏教授の講義をはじめ、県内外の実践校の先生方による実践発表や演習などを通して実践的に研修しました。



教務経営講座（5/12, 6/7, 7/30, 10/18）

「生きる力」の育成をめざす教育課程編成の基本的な考え方やカリキュラム作成について、講義や協議を通して研修しました。



校内研修講座（5/17, 6/29）

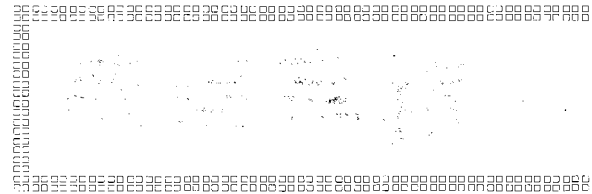
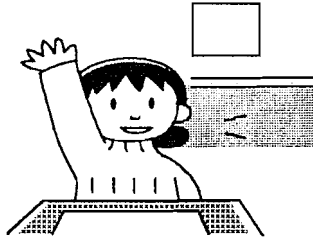
「総合的な学習の時間」の実施に向けた校内研修の進め方について、シンポジウムや講義・協議を通して研修しました。



教養講座（1/13）

映画監督の大林宣彦氏を講師に招き、「学校教育に求めるもの」を演題にした講演会を実施しました。

今年度は、新教育課程の実施を間近に控え、その実施に向けてたくさんの先生方が研修されました。また、それぞれの分野において実践的に研究を深めておられる方を講師に招き、示唆に富んだ内容のお話を聞くことができました。来年度も、これからの教育の在り方を求め、皆様方と共に教育づくりを進めていきたいと考えています。



「まとめ」の視点を明確にしましょう

算数科教育 (小)

—学習したことの価値付けや次時への期待感を
持たせる「まとめ」の場の工夫—

担当：尾形

「分かったことをまとめましょう」「今日の学習の感想を言いましょう」…これらは、授業の最後の「まとめ」の場で、よく聞かれる教師の言葉です。

授業を振り返る、自己評価を促す大切な言葉と言えるでしょう。

「まとめ」は、今日の学習の総仕上げであり、その時間で学習した最も重要なことを簡潔にそして印象的にまとめ、次時につながるようにしなくてはなりません。しかし、子どもたちの様々な反応が示される中で、時間の余裕がなくなり曖昧で漠然としたままでチャイムを聞くことも少なくないのではないのでしょうか。

そこで教師には、短い時間の中で子どもたちにとって明確で分かりやすいまとめ方の工夫が求められます。それは、教師がまとめの視点を明確にもつということです。その視点としては次の2点が考えられま

す。

1 点目は「どのような考え方が役に立ったのか」「その考え方はどのようにして考えついたのか」など数学的な考え方とそのよさに着目するものです。

2 点目は、「今日の学習を使うと次にどんな学習ができそうか」「今日学習したことは生活の中でも使えないか」など活用に着目するものです。これらを視点とした「まとめ」の場は、子どもたちに今日学習したことの価値を見いださせ、今後の学習への期待感をうながすことになり、算数を主体的に学ぼうとする子どもを育てる上で極めて重要なものと言えるでしょう。

このようなまとめは、子どもがすぐに自力でできるものではありません。先ず、先にあげた2つの視点にそった質問を絶えず繰り返して行うことが大切です。そうすると子どもたちは、次第に2つの視点で今日の学習をまとめようと自分に問いかけるようになり、いろいろな学習場面で数学的な考え方が繰り返し用いられていることに気付くとともに、数学的な考え方でこれからの学習や身の回りを見つめ、新たな課題を自ら発見していくようになるのです。

工夫しましょう

幼稚園教育

—楽しみながら数量やルールへの理解を深める
遊び—

担当：名和原

子どもは生活の中でいろいろな遊びを繰り返しながら、数量にかかわる経験を重ね、次第に数量への理解を深めていきます。数量のみをとり出して認知するということはほとんどなく、生活そのものと結びついた、総合的な経験として習得していきます。

たとえば、砂場で穴を掘ったり、山や川・ダムをつくったり、だんごをつくったりすることを通して、「深い—浅い」「高い—低い」「多い—少ない」などの量感をからだ全体で、実感し身に付けていきます。そして、ままごとやお店屋さんごっこを通して行われる、「家族の人数分だけ茶わんと皿とスプーンをそろえる」「ごちそうをつくる」「遊んだ後で道具をそれぞれ分類整理して、きまったところに片付ける」という活動のなかに、「1対1対応」とか「集合」といった考え

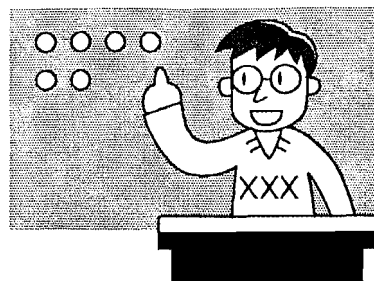
方の芽生えがみられるのです。

このように、幼児期の知的発達は遊びの中で直接的、具体的な体験を通して実現されていきます。そこで教師は、幼稚園の生活環境の中に数量にかかわる体験が豊かであることを認識し、機会を生かす工夫をすることが大切となってくるのです。

さて、寒くなって室内遊びが多くなる季節になると盛んに行われるのが‘すごろく’‘かるた’といった伝統的な遊びです。これらの遊びは、家族や仲間にも助けてもらいながら遊び方(ルール)を知ったり、遊びの楽しさを味わったりする中で、数量概念をさらに確かなものへと高めていくことができる遊びと言えるでしょう。そこで、地域や幼稚園の特徴を生かした‘地域マップすごろく’‘○○幼稚園すごろく’といったオリジナルのすごろくを作ってみませんか。地域や幼稚園への親しみも一層わき、生活空間が広がるとともに知的発達を促す機会も増えると思います。

理解の程度は一人一人に差があつて当然です。そのような子どもと一緒に遊んで楽しめるように工夫していきましょう。





取り入れてみましょう

音楽科教育 (小)

—自分と音楽とのかかわり方を学ぶ学習の方法—

担当：井坂

新学習指導要領では、総合的な学習の時間も含め各教科・領域で、子どもに「自ら考え自ら学ぶ力」を育成していくことを重要な柱の一つとしています。

音楽科においては、生涯にわたって音楽とかかわり、音楽に親しんでいくための基盤として「音楽とのかかわり方を学ぶ」学習の充実を図り、子どもが、美しい表現をめざして歌ったり演奏したりする活動を通して、演奏の技術や工夫の仕方を身に付けていくことが重要になります。

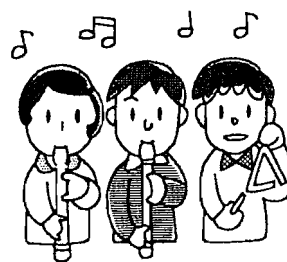
そのためには、体験的で活動的な学習、問題解決的な学習、そして「学び方」を身に付けるような学習が必要になってきます。

例えば、「音楽をつくって表現する活動」において、作り方の方法や手順を全部先生から教えてもらって学習するのではなく、数種類のリズムを組み合わせて

できたものや声や言葉を重ねたり繰り返したりしてできた作品などいくつかのサンプルを用意し自由に聴くことができるようにします。次に、その作品をつくる方法を実際に体験できる簡単なチャレンジコーナーを準備します。その中から自分のやってみたいものを選択して学習するような課題選択的な学習にします。そして、自分の表現したいテーマを決め表現方法の違いによるグループを編成して問題解決的な学習に発展させていった実践があります。

この実践では、子どもが失敗したり悩んだりすることが多いので教師の支援や事前の準備も大変でしたが、子どもは自分の思いや音にこだわりを持ち続け、それを実現することに向かって主体的に楽しく学習することができたようです。

このような学習を繰り返して子どもたちに経験させていくことが、音楽科における「学ぶ力」を育成し「自分と音楽とのかかわり方を学ぶ」ことにつながっていくのではないのでしょうか。



工夫しましょう

外国語 (英語) 科教育 (中)

実践的コミュニケーション能力の育成を図る指導

—「言語の使用場面」の設定の仕方を工夫して—

担当：藤村

今回の教育課程の改訂により、外国語教育においては「実践的コミュニケーション能力の育成」が求められています。

「実践的コミュニケーション能力」とは、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力です。その育成のためには、言語の働きを考えながら言語を使用する場面を設定することが重要です。

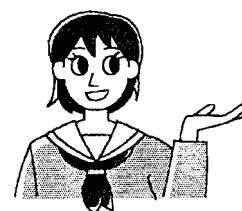
新学習指導要領では「言語の使用場面」や「言語の働き」など言語活動を指導する上での配慮すべき事項と表現例が示されています。

例えば What's this? は言語の働きでいえば「質問」です。しかし、自分の机の上に突然置かれた封筒を見た人が「What's this?」と言った場合、それは必ずしも

「質問」とは限りません。「内容は何だろう」「どうしろというんだろう」という思いの表出である場合も考えられます。

言葉はそれが使われる場面によって意味が異なってきます。「What's this?」「It's a _____」をよくペア・ワークしますが、What's this? の働きを考えると使用場面によっては「本当に知らないものを確認するための質問」「できあがったものが自分の思いと違っていたという気持ちの伝達」「目の前の品物をどうしたらいいのかわからないという気持ちの表出」などのような働きで使用される場合があり、その場その場に応じたコミュニケーションが必要となります。

このように、生徒は言語の使用場面を考えて言語活動を行うことにより、その言語がその場面でどういう意味で使われているかを考えることができます。その場に応じた英語を運用することができる能力はまさしく実践的コミュニケーション能力であり、その育成はコミュニケーションの楽しさを味わわせることにつながるのです。



教育センターひろば

コンピュータ研修室の機器更新



コンピュータ研修室に設置している22台のコンピュータのハードウェアとソフトウェアを最新のものに更新し、MOドライブなどの周辺機器も充実させました。保護者を対象としたアンケートや子どもの実態調査等のデータ処理にもご活用ください。

教育研究発表大会の開催



指導主事の研究と教育センターで半年間研修した教員長期研修生の研究の成果を合わせて発表するようになって、今年度で3回目になりました。おかげさまで年々参加される先生も増えてきています。来年度もぜひご参加ください。

「総合的な学習の時間」のハンドブック刊行

「総合的な学習の時間」について、その考え方や実践のヒントになるものをハンドブックとして作成しました。今年度中に、小・中・養護学校の各教員に一冊ずつお届けする予定です。



リーフレットの配布

昨年度に引き続き、今年度も「総合的な学習の時間」について、新しい学びを創るためのヒントとなるような内容をリーフレットにまとめて配布しました。各学校の実践にご活用ください。



館内作品展示



毎年、広島市立学校の教職員の方々の作品（絵画、書、彫刻、工芸）を館内に展示しています。センターを利用される際、ぜひご鑑賞ください。展示にご協力いただいた皆様ありがとうございました。

人事異動のお知らせ

神津住男主任指導主事が1月1日付で、江波中学校に転任となりました。

表紙絵 広島市立五月が丘中学校長 木村 力太
題字 広島市立緑井小学校長 井西 敏恵

編集後記

年度末のまとめや来年度の準備に向けてご多用のことと存じます。今年度最後の所報をお届けします。今後の指導の充実にご活用ください。

編集・発行／広島市教育センター

〒732-0068 広島市東区牛田新町一丁目17番1号

TEL(082)223-3563

FAX(082)223-3580

E-mail: center@education-c.edu.city.hiroshima.jp

広X6-1999-059(3)